



## 第 16 回 タイ支援活動

本年のタイ支援活動は、新学年が始まって間もない5月30日から、タイ北部チェンライ県メースオイ郡ファイマサン小学校で、例年通りの活動を実施いたしました。なお今回は、日本から三名（山本代表、妻、るみ子、そして佐藤氏）が現地入りし、奨学金の支給や学用品、さらには履物などの支援活動を行いました。その時の様子を詳しくお伝えし、この活動にご支援・ご協力下さっている皆様方への報告といたします。

### 現 地 ま で

5月30日午前9時ごろ関空に集合した。空港はいつもより混雑し、大きなカバンを持った人が多い。タイ航空はほぼ真ん中のDカウンター、ここで私たちが乗るTG623便の手続きをする。以前は旅行社発行のチケットを出して搭乗券と引き換えていたが、いまはインターネットでチケット（Eチケット）を購入し、それを搭乗券に引き換える。

人が多いので、とりあえず税関での出国手続きを先にした。時間があるので免税店を冷やかし、約1時間前に搭乗ゲートへと行く。そこまで行くともう別世界、日本でありながら、なんだかもう外国へ来たような錯覚にとらわれる。ここで前述の佐藤さんと落ち合った。氏は仕事の関係上、外国に長く住んでおられ、英語がとても上手く、このあといろいろな場面で私たちはたすかった。

約5時間30分のフライトで、現地時間午後3時すぎ〔日本との時差は2時間で、日本時間なら同5時過ぎ〕にバンコク国際空港〔スワンナプーム空港〕に到着。そこで入国の手続きをした。入国審査場はガラガラ、ほとんど外国人の姿がない。これにはびっくりした。いつもなら、入国審査の各窓口は長蛇の列。20,30分待つことを覚悟していたが、まったく待つことなくスムーズに手続きがすんだ。これは、私たちが来る少し前、軍部がクーデターを起こしたとメディアが報じていたのに関係あるのだろう。がしかし、このあとチェンライ県でもまたチェンマイ県でも、およそ戒厳令のような雰囲気はほとんど感じられなかったが……。ただ、いつもより軍人さんの姿が多かった。

目的地のチェンライに到着したのが午後7時40分、この空港は、預けた荷物を受け取るのに時間がかかる。しばらく待っていると荷物が出てきたので、私たちの活動に現地で活躍してくれているアヌット氏〔47才〕と再会した。彼との付き合いも、すでに20数年になる。古くからの友人であり、たいへん心強い協力者でもある。彼と共に遅い夕食をとるため、なじみの食堂へと出かけ、その後いつものホテルに投宿した。

## 支援品を買い求める

31日は、ファイマサン小学校の子どもたちに贈呈するため、ゴムゾーリと学用品（ノート、鉛筆）を買いに行く。ここタイでも、物価は徐々に上がってきている。私たちが買う履物問屋での値段は、昨年と同じであったが、学用品のほうは少し値上げになっていた。また、とくにガソリンの値上がりは極端である。もちろん、タイに限ったことではなく、日本でも燃料費の値上がりには、みんな悲鳴を上げている状況だが。

さて、今回の買い物は現地ガイドをしてきているアヌチット氏が、所用でこの日付き合うことができないとのことだった。そこで、私たち日本人の3名だけで買い物に出かけることになった。

まず、はじめに学用品を仕入れに行った。ホテルから歩いて10分ほどのところに店はある。あちこち珍しいものを見ながら、昨年も買った文具専門店に入る。そこには数多くの学用品が置いてある。店員さんに昨年の領収書を見せ、同じ数だけのものを調達した。300人余りの子どもに渡すノートとエンピツ、これはかなりの重量があるので持ち歩くわけにいかない。あとで取りに来るからと、その場に置いてもらうことにした。

次はゴムゾーリである。履物は、もう10年ほど前から同じ店で買っているの、まったく顔なじみになっている。私たちが店に入ると、向こうからもニコッと笑顔で迎えてくれる。昨年の領収書を出し、これと同じものを同じ数だけ注文する。それを手際よく揃えてくれた。この店は、よく流行っているようで、ひっきりなしに客が来る。女店主は、それを上手にさばいている。

さて、ゴムゾーリも300足余りとなると半端な量ではない。先ほど買った学用品と共にホテルに持って帰るため、トクトク（昔のミゼットのよう、二人乗りのタクシー）を呼ぼうとしていたら、店主が声を掛けてくれた。これらの荷物をホテルまで、息子の車で送らせる、と。私たちは喜んだ。実際、どうしてホテルへ持って帰ろうかと、困ったなと思っていた。私たち3人も同乗してホテルまで送ってくれた。

## 元奨学生宅へ

その日の夕刻、元奨学生の家を訪ねた。名前をティダラットという彼女は、いまチェンライから遠く離れたプーケットで外資系企業につとめている。この子とのつながりは、彼女が小学生の時からだ。近くに住んでいた知り合いの先生から、担任しているクラスに、両親がなくて祖父母と暮らしている子がいる。何とか奨学金を支援してやってほしい、と要請されたときにはじまる。なお、このとき、ほかに二名の子ども（姉弟）にも奨学金を支援していたが、二人とも数年前から行方不明になってしまっている。じつに残念なことだが。

さらに途中から、彼女の従兄弟の男の子にも奨学金を支援した。この子はいま、やはりプーケットで母親と共に暮らしているとのことだっ



（ティダラットの祖母）

た。が、二人とも卒業し働いているので、今回は会うことができなかった。家では祖母がひとり暮らししていた。この方は足が悪く、一人暮らしはたいへんだろうと思った。前回尋ねていった時は道に迷い、家を見つけるのに時間がかかった。今回は目印を付けておいたのですぐに分った。家では祖母が一人でいたが気丈そうな方で、明るく元気でおられた。話をしたくても言葉が分からず、しばらくのちお土産を渡して辞退した。

その帰り道、先ほど話した、ティダラットさんを紹介された先生のお宅を訪ねた。運良く先生も、また家族の方々も在宅されていたので、ご家族の健康を祝して、ティダラットさん宅を訪ねたことを伝えておいた。

## フェイマッサン小学校へ

6月2日（月）朝8時30分過ぎ、私たちは活動拠点であるファイマッサン小学校へと向かう。ホテルから学校までは約1時間30分かかる。このとき、知り合いのタイ人も数名駆けつけてくれ、その車に同乗して学校へ向かった。

途中、去る4月、このあたりでかなり大きな地震があったが、その震源地と思われるところを通った。そこでは、道路が一部陥没したり、波打ったりしていた。この地、というよりタイで地震はひじょうに珍しい。ほとんどの人が、はじめての経験であったので、出会う人みんなたいへん驚いた様子であった。ファイマッサン小学校では被害もなかったが、ここから30キロほど離れたメーソイ郡の中心地あたりの学校や家など、壁が倒壊したり、ひび割れたりしていた。また、ある学校では、そこは四階建ての大きな小学校だが、近くのお寺に避難し、あちこち小さな部屋に分れて授業をしていた。暑いところなので、にわか仕立ての教室で、汗をふきふきの授業風景であった。ともあれ、私たちは10時にファイマッサン小学校へ無事に到着した。

## 贈呈式の様子

まず校長のチェッサダー先生が、子どもたちにお話された。私たちは、日本という遠いところから、毎年奨学金やその他学用品、さらにはゴムゾーリなどを持ってきてくれているということ。また今回は特にサッカーボールを10個持って来てくれたことも話されていた。だから支援して頂いたものを、有意義に使わなければならない、などと仰っていた。

つぎに、代表の山本から子どもたちへのメッセージを読んだ。これは、前もってタイ語に翻訳してもらっていたので、タイ語で書いたコピーを配り、私は日本語で、掛の女の先生がタイ語で読み上げて下さった。



（ゴムゾーリを校長に渡す）



ファイマサン小学校のみなさんこんにちは。

世界中の人間は、みんな兄弟として仲良く暮らすこと、また困ったことがあればたすけ合うこと、これが人間としての生き方です。

私たちはこの思いで、あなた方の生活に役立つことを念じ、この活動を続けてきました。

私たちがこの学校へ来るようになってから、すでに15年目になります。その間、先生方、また児童の皆さん、多くの人々に出会いました。初めに会った子どもたちは、もうすでに成人した人もかなりいるでしょう。どのような生き方をしているのか、少し気になります。

さて、今回の支援活動も、30人の子どもたちに奨学金を、また全員に、ノート・エンピツなどの学用品と、ゴムゾーリを持ってきました。これらはすべて、私の活動に協力して下さっている日本人たちからの贈り物です。

あなた方も、大きくなったとき、他の人に喜ばれ・感謝されるような生き方をして下さい。それが、私たちに協力して下さっている日本人たちへのお礼です。

奨学金は、学校で選ばれた30人の子どもたち一人ひとりに、私たちから一人1,000バーツを手渡した。そのあと奨学生と先生、そして私たちとの記念写真を撮る。なお、児童全員への支援としてゴムゾーリやノート・エンピツなども渡した。

なお、奨学金のことですが、来年から渡す対象を変更しようと思っております。今までは、当小学校の児童30人に手渡すという方法でしたが、来年からは、近くの学校(メースオイ郡のバン・パートンガン小学校)に変更いたします。この学校の校長先生はプラパット先生で、以前日本へ来たこと



(奨学生・先生と共に)

があり、そのおり、私どもの家にお泊まりいただいたというつながりがあります。そのようなご縁があり、この学校の4人の子どもたちに、年3千バーツを支給することにしました。支給方法も、学校で渡すのではなく、子どものお宅を訪ね、親御さんと共に手渡すというものです。また奨学金は、毎年同じ子どもに対して、その子が学校を卒業するまで続けるということです。いまは小学生なので年3千バーツですが、中学、高校ともなれば、先生と相談しつつ、奨学金を増額していく予定です。

なぜ、このような形に変更したかということですが、学校でみんなの前で渡していたら、奨学生との個人的なつながりが深まりにくいのです。奨学生に次の年に会っても、顔を忘れているというような状態では、なかなか個人的な親密感が深まりません。前述したように、また前回の機関誌で報告いたしましたように、奨学生との親密感を深めるには、その子の家に出向き、親も交えたなかで渡す。さらに食事でも共にする、という方がよりいいのではと思われます。

なお、この件は双方の学校へ前もってお伝えし、先生方の了承も得ております。またファイマサン小学校への支援は、必要な教育資材—たとえば図書室への本など、を先生からお聞きしたうえ準備したいと考えております。もちろん、ゴムゾーリや学用品などは、いままで通りに支援する予定です。

さて、そうこうしているうちに時間になったので、職員室で先生方と共に昼食をいただいた。この食事は、いつも私たちの口に会うようなものを準備して下さっている。



(サッカーに興じる子供達)

## 幼稚園へ届ける

昼食後、校長先生と女の先生の先導で、私たちは二人の奨学生の家を訪ねたが、その前に、近くにある幼稚園を訪ねた。ファイマサン小学校から近くにあるこの幼稚園 (Ban Huai hki lek mai Preschool) 園長先生の名前は Walaiporn Pornthipworakul で、持参したゴムゾーリや子供服などを手渡した。当日、園児は誰もいなかったため、今日はどうなっているのかとお聞きする。例の地震のため、園の壁が大きく倒れ、ひじょうに危険であり、修理をするので、しばらくは休園していると話されていた。見れば、あちこちの壁がはがれ落ちていた。かなり大きなものだったようだ。ともあれ、みんな無事であったことを聞き、安堵した。



(子供服とゾーリを贈呈)

## 奨学生の家へ

### 1、マニタさん（小1、女の子）

第一の訪問先は、学校から車で数分のところだった。この地域には山岳民族の人たちが数多く暮らしている。山の斜面に点在する家10数軒ほどは、床や壁が竹製で、屋根にはカーという葉を二つ折りにしたものをかぶせてある。じつに簡単な作りで、隣近所の人たちがたすけ合って組み立てていくようだ。家の内部には、私たちの家にあるようなものは何もない。これはまるで、キャンプ場のテント内と同じだと感じた。私たちは、それと知っていたので、訪問先への手土産として、壁に掛ける時計と菓子を持参した。

さて家族構成は、父51才、母39才で、二人の兄はそれぞれ21才と18才、それと本人との5人家族である。この日、父親は不在だった。聞くと、畑へ行っているが、遠いので数日間泊まり込みで行っているらしい。作るものは米とトウモロコシなど、自給自作の生活に近かった。



（奨学生の自宅前で）

### 2、ブンティタさん（小3、11才の女の子）

次は、先ほどの家から少し離れたところに行った。この子は、父親（36才）と弟（7才、幼稚園児）との3人暮らしをしている。父は、他の村で生まれ育ったが、5年前に仕事を求めてここに引っ越してきた。いまの仕事は少しの農業と、草取りや道路掃除などの日やとい仕事（日当150バーツ）である。というのは、タイ語が分からない人にとっては、このような単純作業しか残されていない。母親は離婚して、いまは他所に暮らしている。ここにも、手土産として掛け時計とお菓子を手渡した。もちろん、家の造りは前述したものと同じである。



（奨学生の自宅前で）

#### 【奨学金受給の条件】

奨学金の支給は先生方の相談によって決められているが、その条件は次のようになっている。

- 1、家が貧しい子
- 2、学習意欲がある子
- 3、先生の言うことをよく聞いて成績のよい子
- 4、学習に積極的な親の態度
- 5、上記を先生方が検討し、家庭訪問のあとに決定する



## 他の学校を訪ねる

翌6月4日、旧知のプラパット氏が校長をつとめる、バン・パートンガン小学校を尋ねた。訪問の目的は、前もって手紙で伝えておいた。来年から奨学金支援の活動を開始する件で、細部の打ち合わせのためです。

学校へ着くと、校長先生から4人の子どもたちを紹介され、その子たちの履歴書をいただいた。次年度から奨学金を渡す子は、男の子1人と女の子3人である。奨学金は、当面3千バーツであるが、高学年になれば増額する旨も伝えた。また、それを渡す場所は学校ではなく、彼らの自宅へ出向き、親、保護者を交えた中で、いろんな話を伺いながら渡すように考えている。そのほうが、個人的な人間関係を構築しやすく、より深い親密感・親近感が生まれると思われる。

学校で写真を撮ったのち、先生がこの子たちの家へ案内してくださった。つぎに、この子たちの略歴を記載します。

- 1、Orakosh Boorsom [女] 2007年6月30日 生 (7才)  
成績優秀で、掃除婦をしている父(37才)と暮らしている。
- 2、Peerapat Rongharnkaew [男] 2007年2月7日 生 (7才)  
祖母と二人暮らしをしている。
- 3、kannika Tiamkiri [女] 2007年8月8日 生 (7才)  
父(41才)と母(32才)と暮らしている。
- 4、Passaporn Lungta [女] 2008年2月21日 生 [6才]  
親元を離れ、寮に入っている。

この子たちの自宅は学校の近くにあり、ごく田舎の風景であった。この時間は、働いているのであろう、親に会って話すということはできなかった。学校へ戻って食事をいただき、また果物(マンゴー、リンチなど)をおいしくいただいた。なお、この学校の規模は、児童105人、先生8人という中規模の小学校である。また幼稚園も併設されている。



(新しい奨学生達)

## 最後に

今回のタイ北部チェンライ県での支援活動も予定通りに実施し、無事終了いたしました。私どもの活動への期待は、現地では多大なものがあります。それを私たちは肌で感じ、より一層充実した内容にしなければと思っております。

それもこれも、とにかくこうして活動できるのは、日本で地道にご協力下さっている、数多くの皆様方のお蔭であります。誌上を借りて、改めて厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

この活動は、世間のNGOに比べ、そうたいして大きいものとはいえませんが、少しでもタイと日本の信頼関係の橋渡しになればと願っております。これから先も、さらなるご支援・ご協力をお願いし、今回の活動報告といたします。

最後に会計報告を致します。

会計報告 ( 13・11 ~ 14・6 )		単位 円	
収 入		支 出	
奨学金寄付	142,000	現地活動費	256,943
寄付金と会費	10,000	印刷費	21,000
リサイクル売却益	63,720	通信費	17,920
衣類送料寄付金	7,500	車両費	48,390
葛城山麓を守る会々	100,000	葛城山麓活動費	12,000
天、たすけ合いネット	100,000	雑費	68,310
前年度繰越金	18,127	次年度繰越	16,784
合 計	441,347	合 計	441,347

※ 1バーツ = 3,3円

### 現地活動費内訳

奨学金	100,000	学用品(ノート、鉛筆)	9,270
ゴムゾーリ代	22,473	通信費	13,850
交通費	61,600	その他(手土産など)	49,750

差引残高 16,784 円 (次年度に繰り越し)